

なぜ装いを合わせるのか

—日本の就活を事例に—

平沼礼羅

キーワード: 就活、装い、画一化、ハビトゥス、実践

## 要旨

本研究の目的は、現在日本の就活生の多くが画一的な格好で就活に臨むのはなぜか、また画一的な格好で就活に臨むという現象がどのように再生産され維持されているのかについて明らかにすることである。本論文は8章からなる。序論である第1章では本研究の目的や背景、本論文の構成について述べる。第2章では本研究で取り扱う「就活」等のキーワードについて定義づけを行い、就活時の装いの現在やそのあり方へ抵抗する取り組み、戦後から2010年代までの就活の装いの変遷、異文化として見た日本の就活について紹介することで、現在の日本における一般的な就活生の装いとどのようなものであるのかという前提を確かめる。第3章では、本研究での分析に用いるハビトゥス概念、人類学における実践概念について取り上げるとともに、就活時の装いや装いの同調について扱った先行研究に触れ、本研究の位置付けを確認する。第4章では、筆者が行なった調査の概要について述べる。第5章では、就活支援のアドバイスや就活生側の意識に見られる、日本の就活時の装いにおける「風潮」について捉えた上で、画一的な装いをするという風潮が生まれ、再生産され、維持される流れについて、ハビトゥス概念を用いて分析する。第6章では、ハビトゥスがより理に適った実践を生み出すという点に着目し、画一的な装いの理に適っている部分、受け入れられている部分についてインタビュー調査の結果から分析する。第7章では、画一的な装いの問題点について述べ、画一的な装いやマナーによる制約と個人の実践との関係について分析する。ここまでの調査分析をもとに、第8章の結論で研究設問に答える。

2000年代から2010年代にかけて、スーツを売り出す側の販促、不況、インターネットの普及、その他諸々の社会的要因を受けて生まれた、黒のリクルートスーツを着る、周囲と装いを合わせるという風潮は、中身重視の採用方法と合致していたり就活生が装いについて悩む努力を減らしたりと、ある程度理に適っていたことから受け入れられ、就活関連業界による指南、画一的な装いで就活をした就活生たちの経験などによって再生産され維持されてきた。その中でも、ジェンダー観等社会的要因の変化や装いのあり方を変えようとする取り組みによって、風潮に微細な変容が起こっている。風潮に抵抗する取り組みが今後も起こり続けていけば、装いを周りと合わせるために無理をする人が減っていくかもしれない。